孤独な愛され女王蜂　２

孤独な愛され女王蜂　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19423597

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, 芹霊

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番は芹霊です。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　２

「『運命の番』……通りでフェロモンがキツいと思ったぜ。こちとら最高クラスの抑制剤飲んでるのにな」
目の前の坊主頭のアルファは、ポケットからフリスクの入れ物を出して、おそらくアルファ用の抑制剤を追加で口にする。
へえ。
セックスが目的じゃないのか。
「何の用ですか」
警戒を悟られないように、営業スマイルで俺は道を塞ぐ男に話しかける。
「お前にテロリストの容疑がかかってる」
「はい？」
「俺はこう言うものだ」
警察手帳を出されて固まる。
えっいや俺捕まるような事やってないけど！？
「影山茂夫、影山律、芹沢克也、上級悪霊エクボ、花沢輝気、鈴木将……この名前に覚えはあるな？」
「そりゃあ、俺の仕事手伝ってくれてるやつらだな」
はっ、と目の前の警官は嘲笑う。
「その『仕事』ってのは国家転覆のことか？」
「はあああああ！？霊とか相談所のことだよ！！」
カチ、と警官は新しいタバコに火をつける。くそ、勝手に吸ってんじゃねぇよ、アルファ臭え。
「ソレ以外にもテメェは優秀なアルファを集めてる。……何企んでやがる？正直に言え」
「楽しい毎日だよ！！」
とうとうキレて俺は叫ぶ。
「優秀で便利で俺の言いなりなアルファを集めて、快適に毎日過ごしたいだけだよ俺は！！国家転覆？何か企む？何だよソレ楽しいの！？！？！？！？」
ぽかん、と目の前の警官が虚をつかれた顔をしている。

「……霊幻新隆、お前、本当にオメガか？」
「は？オメガならアルファに隷属して一生を捧げるもの信者のお方ですか？」
「いや、そうじゃないが……あまりにも規格外だ。お前の言う事が本当なら、このパターンのオメガは初めてだ」
大抵のオメガはアルファフェロモンにメロメロになって番となったアルファの奴隷みたいになってしまう。
これにはカラクリがある。オメガ用の抑制剤のせいなのだ。日本で出回っているものはヒートを起こさせない強力なものなのだが、それだけ強い抑制剤を飲むとオメガフェロモンはほとんど出なくなってしまう。
オメガフェロモンはアルファフェロモンに対抗するための防御物質でもあるのだ。
盾を無くしたオメガは、フェロモン垂れ流しのアルファに簡単に誘惑・屈服させられてしまう、ということだ。
それにアルファは優秀だ。優秀ゆえにプライドが高く、オメガの下になんか死んでもつきたがらない。それをセックスとフェロモンで釣って俺は上手い事利用してる、というだけだ。
抑制剤をほとんど飲んでいない俺のフェロモンは濃く、強い。
抑制剤の副作用である女性化もほとんど起こしていない。
俺はオメガの盾であり矛であるフェロモンを、おそらく他に例がないほど使いこなしている。
「……と、言うわけだ」
「……そんなことが可能なのか？」
まだ警官はいぶかしげだ。
「そんなことをすればアルファ同士で殺し合いが起こりかねない。現実、オメガをめぐっての殺し合いってのは良く起こってんだ」
「あー……まぁ、アルファの性格は良く選んでるかな。セフレでもいいってやつとしか付き合ってないし。そもそもフェロモンをたっぷり浴びせてやってヤらせるとアルファの凶暴性ってかなり落ち着くぜ？アンタも経験あると思うけど」
警官は複雑な顔をする。
あ。

これ、オメガを抱いた事ねぇな。
イタズラ心がむくむくと沸いてくる。
「なんだ、お巡りさんオメガ童貞ですかー？なら、俺がヤらせてあげよっか？きっと気持ちいいぜ……運命ックス」
俺はくすくす笑いながら、お巡りさんに近寄ってすり、と頬を撫でる。
「……巫山戯ろ」
必死に警官の手が、俺を引き離そうと血管を浮かせる。
だけど運命のオメガのフェロモンってのは相当ヤバいらしい。お巡りさんはみじろぎできず、悔しそうにぐぅっと唸った。

「何してるんですか、霊幻さん」

だがその俺のイタズラは、ベリっとお巡りさんから俺を引き離した芹沢の不機嫌そうな声で中断された。
「今日は俺の番でしょう？フェロモンを追ってきたらまた別のアルファと遊んでるんですから……えっ！？ヨシフ！？！？」
芹沢の俺を抱きしめる力が強くなる。
「……何の用ですか。俺、ヨシフさんに嗅ぎ回られるようなことしてませんけど」
「今回はお前じゃない。そこの女王蜂みたいなオメガに用がある」
芹沢が俺をヨシフさんから隠すように全身で抱きしめてくる。
「芹沢、大丈夫だから。相手の用件を聴こう、な？」
俺は優しく芹沢の背中をなでてやる。芹沢の身体から緊張が取れてきて、ほっとする。他のアルファからオメガを守ろうとするとラットに入ってしまうこともあるから、このあたりは気を使う。
「……これから俺はアンタの内定に動く。アンタの思想と周囲を探り、逮捕すべきかどうか判断させてもらう。……だから今日はその挨拶だ」
「ふぅん。なんだ、そんなことか。はじめまして、俺の運命。こんにちは。そして今日のところは、さようなら」
アルファを集めてこき使っている以上、こういう疑いが掛かることはある程度は予想していた。

ま、後ろめたいことなんて何も無いから、内定調査なりなんなりなんでもしてくれりゃいい。
今日は芹沢の番。そのことの方が俺には大事だった。
正直、運命のアルファのフェロモンにはあらがい難い魅力を感じる。
だが、そのフェロモンの誘惑を芹沢のフェロモンで上書きできるくらいには、俺は色んなアルファのフェロモンを味わってきたし、芹沢のことが好きで大事だった。
「運命って何ですか、霊幻さん。あの男がまさか霊幻さんの運命の番なんですか」
「そうらしい。でもまぁ、どうでもいいじゃねぇか。今日は芹沢の番、そうだろ？行こうぜ、芹沢」
芹沢の抱き付きをやんわりとほぐして、その腕を絡めてあってラブホ街の方に向かう。
「あ……」
だが。
愚かにも、ヨシフさんはその去っていこうとする俺の腕を掴んだ。
「あ？」
ヨシフさん自身が何故そんなことをしたのか分かってない驚愕の声を上げている。
「すまん、こんな事をするつもりは」
ヨシフさんは戸惑って謝罪をしてくるが、がっちりと捕まえた手を離すそぶりはない。
ぐるる、と犬歯を剥き出した芹沢がヨシフさんを威嚇するように喉を鳴らす。
いけない。
このままではラットに入ってしまって、警官に超能力を使ってしまうかもしれない……！
「ヨシフさん、大丈夫だ。大丈夫、深呼吸して、俺のフェロモンを吸え。そしたら指が動くようになるから」
俺は自分の首筋を、ヨシフさんに抱きついて吸わせる。
「……っ、ぶはっ」
運命のオメガのフェロモンを吸って本能が安心したヨシフさんの指

がゆるむ。
「ほら、人差し指から、順に」
震える指が、一つずつ外されていく。
「はいよくできました」
全部外れたところで、俺はヨシフさんを軽く突き飛ばして、芹沢の手を取って走り出した。
「じゃあまたな！」
「う、あ」
本能と理性がめちゃくちゃ戦っているヨシフさんを置いて、俺たちはまっすぐ慣れたラブホに向かう。
「はー、厄介なアルファに会っちまったかもなぁ」
これまで付き纏ってくるアルファは、警察に通報すればそれで終わりだった。オメガへの付き纏いはかなり厳しい注意が警察から下される。破れば問答無用で刑務所行きだ。
だけど相手がそもそも警察だと、この辺は無視されてしまうだろう。
ヨシフさんはこれまで会ってきたアルファの中では、相当理性的な方だ。本来俺に誘惑されるタイプじゃない。俺も扱いにくいからまず誘惑しないタイプだ。
だが、運命の番だった。アルファの本能も、オメガの本能も激しく刺激される。
あそこに芹沢が来てくれなかったら、俺もあのフェロモンはヤバかった。他のアルファの、嗅ぎ慣れたフェロモンを吸えたから、俺はなんとか自分を保てた。
アルファフェロモンというか、バース性フェロモン同士は拮抗する。これを本能的に知っているから、オメガはオメガを、アルファはアルファを基本的には忌避する。自分の番に影響するからだ。
だからオメガを本能的に何人も囲おうとするアルファは自分を保つと言う点である意味理性的であろうとするのに有効だし、俺みたいにアルファに囲まれて暮らすオメガも理性的に有効、というわけだ。日本では道徳的にはちょっと問題があるけども。
「芹沢、ありがとうな。迎えに来てくれて助かった」
ラブホの部屋で荷物を置いて、服を脱ごうとする。

「あ、俺、晩めし食べ損ねてるんで、ピザ頼んでいいですか？」
「またかよ？いいよ、待っててやる」
脱ぎかけた服を整えて、ネクタイを緩めて首元のボタンを外す。
芹沢とはオッサン同士、気楽でいい。その上にアルファフェロモンが濃いんだから最高だ。
「あー、お前のフェロモン、落ち着く」
背伸びして芹沢に抱きついて、首筋に口付けながら深呼吸すると、びくりとまだ接触に慣れない芹沢は身体を硬直させる。
それからおそるおそる、やんわりと俺を抱きしめ返してきた。
「俺も霊幻さんの匂い……落ち着きます……」
「嘘つけよ、興奮してるくせに」
ごり、と太ももで芹沢の大きくなったテントをこねてやると、また芹沢の身体が跳ねた。
「霊幻さ――」
「お、ピザ来たぞ」
ぱっと身体を離して、前屈みになって動けなくなった芹沢の代わりにピザを受け取ってやる。
「ほら、早く食ってセックスしようぜ」
一緒に暮らしてる医者の彼氏が、門限を夜の３時にしてる。それまでには帰らないと、色々とめんどくさいのだ。
「……そうですね。どうです、霊幻さんも、一切れ食べません？」
「お、いいの？」
俺と芹沢はラブホのソファーに座って、お高いピザを口に運ぶ。
うーん、焼きたてかな。美味い。
「霊幻さん、ふふ、どうやったらそんなに汚せるんですか」
芹沢は目を細めて俺の口元から食べかすを取って口に運ぶ。
へぇへぇ。これからセックスできるオメガは可愛く見えて仕方ないんですね。
俺はその居心地の悪い愛おしそうな視線から目を逸らす。
俺があちあち言いながら一切れ食べる間に、芹沢は残りをあらかた食べてしまった。
「先シャワー浴びてますね」
「ん」

俺はヒート前のただの男性である身体を見られるのはキライだ。
だから一緒にシャワーは浴びない。どれだけ乞われても。
ピザを食べ終えて、ついてきたコーラでヒート誘発剤を飲む。
上着を脱いでスラックスも脱いで、靴下も適当にその辺に置いて、
芹沢が風呂から出てくるのを待つ。
芹沢と入れ替わりにシャワーを浴びて。
「せりざわぁっ♡」
「……っ、霊幻さん……っ」
いいかんじに、ひーとが、キマってきた♡♡♡
「せりざわ、キスして、犯して、はやくぅっ♡」
「霊幻さん、たまらないです、すぐ犯してあげますね」
せりざわはちゅーして、ちくびをさわってくる。
ちがう、そんなとこ、あっ♡あう、きもちいいっ♡♡
「あっ♡あぁんっ♡せりざわ、せりざわぁっ♡」
「霊幻さんおっぱい触られるの好きですもんね。いっぱい触ってあげますね」
すってかじってなめまわして、指でくりくりカリカリぴんぴんはじいて、やだぁっ、せりざわの、へんたぁいっ♡♡♡
「あっ、あっ、あァ……っ♡やだぁイっちゃう、ちくびでイくからぁっ♡」
もったいないっ♡チンポでイきたいっ♡
「はやくぅ、せりざわぁっ♡」
うすいゴムっ♡それすきぃっ♡
「あ、ぐ、う、」
おっき……い、息、止まる……っ、
「霊幻さん、大丈夫ですか。もうちょっとで全部入りますから」
「ぁがっ」
ずちゅんって♡言ったぁっ♡
「すご……っ♡挿れてるだけで、じんじんするぅっ♡これ好きっ♡芹沢チンポ大好きっ♡♡♡」
「酷いな、ちんこだけですか？俺の事は？」
「芹沢のこともっ♡大好きぃっ♡」
すきすきだいすきあいしてるぅっ♡

「はは──嘘つきだなぁ、霊幻さんは」
「なんだよぉっ♡嘘じゃないっ♡」
「でもそんな所も愛してますよ、霊幻さん」
あ♡おく、ぐりってしたぁっ♡
「芹沢もぉっ♡嘘吐きだぁっ♡」
「──嘘じゃないです」
ずん♡ずんって♡おっきいのがっ♡のうまで犯してくるぅっ♡♡
「あぁあああぁぁああっ♡せりざわぁっ♡すごいぃっ♡♡」
「霊幻さん好きですもんね、俺のちんこ」
「好きぃっ♡だいすきぃっ♡♡……ぁ！♡」
びびびび、って全身に電流がはしって。
「イっ……♡」
白目を剥きそうな快感にのまれる。
「あぁ……気持ちいいです」
じわあ、とお腹の中であたたかいものがでたかんかくがする。
「もう一回、いいですよね？霊幻さん」
俺は目にはーとを浮かべて、こくこくとうなずく。
「おいでよ、あるふぁ……♡」
ゆったりとせりざわは口づけてきて、おれはそれにもかんじて、甘イキした……♡

「俺の愛してるが嘘だったら良かったですね、霊幻さん。オメガなら誰でもいいのなら、あなたにとってどれだけ都合が良かったでしょうね？……ダメですよ、霊幻さん。もうあなたはダメなんだ。俺たち（・・・）はあなたを、骨の一欠片だって逃がしはしな

い。……たとえ運命に逆らってでも」

んあー？せりざわ、なんかゆった？♡

続